

第4回 京都建築賞

藤井厚二賞 意見交換会

藤井厚二賞審査委員会
顕彰制度特別委員会
京都大会実行委員会

河井敏明氏・畑 友洋氏・森田一弥氏
岩村眞喜雄・高木伸人・高橋 勝・中西ひろむ・速水実千子
黒木幹雄

今年度新たに創設した藤井厚二賞の審査を控えた2月24日、審査委員の3氏を迎えて意見交換を行った。藤井氏へのリスペクト、「京都」そして「木」に対するお熱い思いを語っていただいた。

藤井厚二におもむくこと

【高木】 先ず、藤井厚二をどのように思ってきたかお聞かせください。

【河井】 環境問題への興味もあって、藤井厚二の事は以前からずっと見てきていました。ですが、藤井厚二賞の企画を伺った印象としては、大きな話になっちゃいましたね〜と思いました(笑)。すごい名前がついてしまったなああと。

【畑】 学生の時は、とにかく渋い存在だった。大学院生くらいになってくると、ローテクなだけけれども発明的な、つまり環境装置、風洞であったりとかが見えてきた。しっかり観察すると、トラデザインとしての教寄屋の枠に収まらない作り方を模索しているという事が伝わってくる。

例えば、ブルーノ・タウトについてはトラデザインをうまく使った建築で、少しギミックみたくに見えるが、結構好きで見えていた。同様に藤井厚二の聴竹居もそのように見ていたところもあった。

藤井厚二という人は、初めて京都というものをドライに扱える人だったのではないかなと思った。ブルーノ・タウトとの共通項として認識していた。いまでもその認識に変わりはない。

【高木】 藤井厚二はもともと京都の人ではなかったですね。

【畑】 広島県の福山出身です。

【高木】 確かにそういった事もあるかもしれないですね。客観的で、情に流されないような感じが。

森田さんはどうですか？

【森田】 学生の頃は、藤井厚二を知らなかったですね。聴竹居はまだ公開していませんでした。作品自体も最近ようやく見られるようになって、興味を持つようになりました。

先ほど畑さんが、京都の伝統を客観視していたという事を言われていましたが、同感ですね。

僕も京都の生まれではなくて、建築は京都で勉強しましたが、京都人になりきれないまま京都で設計している立場の人間からすると、京都の美意識ではなくて風土や気候から建築を発想している、その距離感にすごく共感する。外部の目線というか。

「京都」について

【高木】 みなさんが建築を設計される時、いわゆる「京都」と言うものがガラチラ頭にあるものなのでしょうか？

【河井】 ありますね。ある中で、畑さんが言った伝統みたいな事、教寄屋みたいな話になったとき、関係ない、と思ったわけですよ。

藤井厚二は、エンジニアリングとハッピーな関係を築いているのが、あるべき姿かなというスタンスで、例えばアラップとピアノと一緒にやっていることが建築として本流と思っている。

記号的な物とか物語的な物、シンボルズム的な物という文脈とは、もともと自分は違うなと。シンボルズムと言うものもあるのはあるけども、「京都」というものを考えるときに、それはライフスタイルというものがあって、それが形に翻訳されていると言っただけでも、グルッと回って畑さんの言

う「伝統」と繋がっているとさえ言えない。

なので、京都建築賞で藤井厚二賞はドンズバリだと思うが、ズバリすぎて、ここで変なものを選んでしまつて藤井厚二の値打ちが下がつたらどうしようと思う。

藤井厚二賞の本質

【高木】 京都建築賞も最初は最優秀賞の該当作はありませんでした。

京都建築賞と藤井厚二賞の差異を一言で言うとはどうでしょうか。

【河井】 畑さんがさっき言ったのは、シンボルズムの部分を外さない差がなくなるよね、という事だったと思った。

【畑】 そうですね。そこが僕の思う差異ですね。

【河井】 ライフスタイルなのかエンジニアリングなのかは別として、岸先生も以前「京都性」と言われていた。

いわゆる京都性の中にある、記号やエモーションナルな物があるが、さらに線引していくと、それらの中にも実は機能があつて、たとえば「格子は実は機能的で云々」などと、ある程度抽象的に解釈されている。あるプロセスを経て評価できるものを藤井厚二賞では選ぶべきかなと思う。



河井敏明氏

ライフスタイルがこういう形状を生み出すとか、エンジニアリングを役立てるためにこういう形になっているとか。山だから三角形というのではなくて、例えばこの空気をライフスタイルの中でこのように使いたいので、風洞を・・・そういう線引のかな。

【高木】 いわゆる記号的な「京都」を離れて、どれだけ突っ込んでいるかということを見たい。

【河井】 そうですね。

【高木】 応募要項や賞の説明文に、「挑戦」や「チャレンジ」といった文言を入れ込みました。藤井厚二はすごくチャレンジしていると思う。

テーマ「木」について

【河井】 今回のテーマは「木」ですね。一般的には「木って優しいですね」と平和な、角を丸めてあるような感じになると思うが、そのような事から少しはなれて、要項には流通等に関する事があっても良いという表現が書いてありますが、「木」って何なのか？どう関わっているのかと言う事にもっとツツコンだ話があれば是非そういうところを拾ってきたい。

【畑】 「木」と言った時点で、既に「京都市性」が始まっていると思う。コンクリートを見て京都を思い浮かべる人はいない。「木」というテーマの時点で「京都」のシンボリズムが既に少し入っているように感じる。やっぱり外部から見るとそうなんじゃないでしょうか。

実は、藤井厚二賞と聞いても、チャレンジングというより、「京都」というイメージが客観的に強いと思う。よく知らない人は聴竹居なんて典型的な京都の建築と思う



畑 友洋氏

人もいるのではないか。

外から見ると、京都のシンボリズムというのはそれぐらい強いものだと思う。なので、藤井厚二と同様とまでは行かなくても、ドライにどこまで見れるかと言うことは非常に重要なことなのではないかと思えます。

【高木】 今、外部から見たら京都イコール木だと言われましたが、そのような自覚はありますか？

【黒木】 自覚はないですが、言われてみればそうだな、と思いました。

【速水】 たしかに、格子とか京的なものは木だと地方から見れば思われるかも。

【河井】 ベタな話で、何も知らない外国人が、東京は近代的だが、京都では木と紙の家によくまげ結って住んでると思っているとそういう事が、日本国内にもあるのでは。「古都京都では、木の格子の家にするではんのか」というふうな（笑）。

【速水】 伏見の鳥居、清水寺の舞台、祇園のベンガラなど。あと、大文字の送り火で木を燃やすなど木のイメージがありますね。

【畑】 それが京都の京都たるところでですね。木なんて世界中あるのに、それを自分

の街のシンボリズムの一部と言わしめるほどの力が「京都」にはあると思いますね。そういうフィルターがかかっていると見えてくるのではないのでしょうか。例えば、米松など使っていると「木の事わかってはらへん」なんて（笑）。

だれも言わないが、京都に於ける「木」という言われ方をした場合、それはドライな感覚でWOODと言えない事になっていく。

賞に応募する人もそういうニュアンスで見ているのではないかという気がします。

【高木】 畑さん、相当京都人になっちゃってますね（笑）。

森田さんは「京都」と「木」の関係をどう考えますか？

【森田】 そうですね、京都が木の文化を背負っているとも言えますが、木は、世界中にあるとも言える。

もし「木」で選ぶとしたら、世界中どこかの建築でもやっていない木の使い方が面白いな挑戦があったそれを「藤井厚二賞」が選ぶ、と言うのは意味があるかなと思う。イチビリじゃなく本質に届いている使い方。

【高木】 それは木と言うものの本質？

【森田】 そうです。それに、この賞は、京都建築賞という本部門があつての対抗馬な



森田一弥氏

ので、本部門で建築の正道を行っていたら、そこで拾い上げられない様な作品を評価する役割かなと。

【中西】 過去の応募作品をみると、いわゆる木っぽいイメージの作品を大手の設計事務所やゼネコンが出してきているわけではない感じがしますね。

【河井】 大きい建築賞ってなんとなく木造住宅とか出すものじゃないよね、ということとなくの棲み分けがありますね。

そこに、「木」というテーマを入れると今まで出されなかった作品が掘り起こされて出てくるという面白さがあると思えます。

木造で、賞の対象ではないという暗黙に埋蔵されていた作品が出てきてもおかしくない。

【高木】 CLT技術で海外では10階建てくらいまで行ける。京都のまちなかで31mの木造のビルがたっちゃいますね。

【河井】 地震の話もありますが、可能になっていくでしょうね。

【高木】 皆が思っている、京都イコール木であるとか、木を使う建築とはこういう物だという呪縛みたいな物がありますね。それを今回、解き放つたら面白いですね。

【河井】 そうですね。藤井厚二は、記号的な物がより多くまわりついている住宅に対して、機能主義的な手法を応用する余地がより多かったのではないのでしょうか。

なので、「木」でチャレンジがあるかと言うことが評価の対象になれば良いと思う。

一方で、木という難しいのは、木そのものももっている価値世界というか、ある種の中庸さという事もあると思う。それは価値のシステムとして物凄くイノベイティ

ブなものしか評価しないとか、すごい材料がでてきてスゲエみたいな事が近代主義では形になっていった。この材料、凄い強度でスパンが飛んで、こういう広いスペースできましたとか。

でも木ってそういう物じゃないという部分がありますよね。そんなに凄く強くないけど使いこなすと使える。今の価値観としては結構嵌まる感じがします。それは僕の中ではどう位置づけるのかという問題がある。藤井厚二という頭を外して考えると。最初はテーマ賞だけだったので。藤井厚二賞となって少し見方が変わるのかなと。それも今言えば新しいといえは新しい。考え方のチャレンジとしては。

【高木】 河井さんにとつては当たり前でも、傍から見れば尖った考えかもしれないのではないですか。要は自分でリミットを設けないのが重要なのでは。そうなる、今回どうして京都の中でどうして木をテーマにしたのか？

【黒木】 いろんな流れがあったのだと思います。例えば、木造の法改正があったし、国土交通省としても木の建築を作ろうとしている。

【高木】 国として木の方向に動かしているというのはいろんな意味合いがある。木というのは国や山の話であり、水資源の話でもある。そのへんの洞察をどこまで盛り込むかというのがありますね。

山の話はどうつなげていくか、山の生産者の話し等をどう真摯に受け止めていくかということもある。

【黒木】 調べれば調べるほど、いろいろありすぎて全体でなにかできることはないのではと思ってしまう。ただ、やっつけていくことで少しでも流れをつなげていくことが大事。

【高木】 それと京都がどう結びつくのか。

【黒木】 建築士会の京都全国大会でそれを強く押し出して、それを全国に持ち帰ってもらおうという考えを持っている。

【高木】 それがなぜ「木」なのか。国がやってくるからなのか、じゃなくて京都だからなのか。

【黒木】 京都だからですね。京都と木は結びつく所があると思います。木造建築や木の事で発信するとすれば京都からする。だから京都でやる、という流れだと思っています。

木に携わる京都の人

【高木】 中西さんは木をどのように捉えていますか？

【中西】 京都と木：木を扱える職人さんは多いですね。宮大工、家具職人、庭師。そういう意味では木は身近な存在だと思います。一方で、いわゆるビルのような施設となつた時に突然性格が変わる部分がありますね。

例えば、さつき言った職人さんはあんまり関わらなくなったりとか。そこが建築教育としてあまりうまくリンクしていないと感じます。京都の街全体として木というイメージはないですね。

【河井】 量的な、というか定量的な話としては京都も現代の日本の都市ですから当然そうなのです。ですが一方で定性的、質的あるいはイメージの問題として、京都には数寄屋大工や庭師がいて、彼らが支えているライフスタイルを生きている人が実際にいるという事は思った以上に大きいと思います。何故なら量的な、つまり建築の世界でいえばビル物の世界で木を使う為にもライフスタイル、このイメージの存在は大き

いからです。

木を使うということを環境問題や山の問題の解決法として用いるという事は、考え方としては環境負荷税に近いような話で、方法論としては真つ当だし「有り」なのですが、一方ライフスタイルの中に位置づけが無いまま木の使用を「押し付け」ても上手いかわからない訳です。人々が木のあるライフスタイルを「楽しい」とか「美しい」と感じた時、初めて木は実際に有効に使われる訳です。そして人々に木のあるライフスタイルを実感させる役を担うのは我々設計者ですよ。つまり立体化したり実際のものでしてみせる中で表現するという事です。その局面でレガシーとして木を使うライフスタイルが京都にあるという事が京都の外でも、というかむしろ京都の外の方がイメージとして共有されているということ、これは大きいです。

一方ビル物の世界に木を使うのに作り手側の問題を見てみると、一般の人はご存知無いのですが、実は建設の世界というのは大きな2つの世界に分かれています。木をさわる世界すなわち主に木造住宅をつくる大工棟梁、街場の工務店の世界と、木をさわらない世界、即ちビル物を建てる大手ゼネコンを筆頭とした建設業の世界です。そしてこの2つの世界は全くといって良い程接点がありません。そんな中でビル物に木を使いましょうとなると、主たるプレイヤーである後者には木に関する知識や技術があるメンバーがいないので今ヨーロッパで進んでいるCLTという技術を使いましょうという事になっている。しかしそのヨーロッパには日本のように在来工法の職人さんにあたる人たちがいない中で、全く新しい材料、技術としてイノベティブにやっているとこの構造も理解しておかなければならないと思うのです。一方日本だと相当たくさん木に関連する人たちがいます。京都だとさらにレベル高く集積しています。上手くビル物の世界に「つなげる」事さえできればこの人達は使える訳です。ですから

我々は木の利用という事に関しては世界の中では非常に有利なのです。CLTの技術競争にうち勝たなくても木を使えるんですよ。もちろんCLTもやれば良いのですが、そこにお金をかけすぎて、かたや既存の在来工法の人たちが死に絶えていくというアホな話ではなくて、ちよつと工夫すれば、例えば在来の人に木工所でつくってもらった木パネルをビル物の職人がビルの壁に取り付けるといふように、現在持っている資源だけでビル物に木を使えるのです。そういうインフラが日本には既にあり、その図式の典型が京都なのです。

こういうことが京都でなら描いて見せられるかなと。これが他の地域だとなかなか期待されない。そういうことを言ってもピンと来ない。それは見る方にライフスタイルのイメージがないから。京都でなら、「京都にはしまつた文化があつて」とか「木のお風呂磨いてはんねやろ」みたいな妄想がある中で、ライフスタイルを設計者や職人が表現するということ地盤が京都にはあるし、役割として京都から木の事を発信することは期待されているのではないかと思う。

川上から川下まで木の事に関してすべてあるのは京都、というのはあまり異論がないと思う。

【高木】 それは思われているだけで、本当にそうなんですか？

【河井】 内実本当にそうかと言うと、先ほど中西さんが言ったように全体としては木のイメージはないというのがありますが、実際に寺社や数寄屋に関する木の職人は、ほぼ京都にしかないくらい集積しているというのがあります。

以前、斗棋の斗と肘木でテーブルを作った時、木工作家に相談したが、彼にはできなかった。刃のサイズなどが難しいらしい。困っていたら工務店の兄ちゃんが普通に造って持ってきた。どうやって造ったか聞いてみると、斗と肘木を専門に作って

る工房が京都にあつて、そこに行つて普通に注文しただけだった。なので、京都には斗と肘木だけを造つて商売が成り立つ土壌があるということですね。

京都の外では集積度は全然ちがいますよ。これは左官でも同じこと。

【森田】ただ、普通は知らないんですよ。建築業界の人も殆ど知らなくて、たどつていくとそういう人が居る(笑)。

【河井】左官でも東京はおるか同じ関西の神戸で無理だと言われる事でも、京都なら普通にやつてもらえたりする。

なので、どこかが木の事をやるなら、それは京都だろう、と言うのはありますね。ややもすると、夢の技術CLTの話ばかりになりがちだが、CLTといつてもまだまだ課題もあつてそう簡単な事ではない。この路線を強引にいってしまつとCLTが転けてしまつた時に木の話が皆転けたという事になつてしまいかねない。

木の話はCLTの成功や失敗の話ではなくて、もつと根が深い話のほうです。地域再生、CO₂の話であり、日本でできない場合は他ではできないくらい恵まれていて状況のなかでモデルが求められており、今が外に出せるモデルを作るチャンスではないですか。

それはライフスタイルと関連しているものとして外に発信していける程のネタなのに、CLTと一緒に転けて良いものではない。ましてやCLT技術はヨーロッパの第2グループぐらいと日本は一緒にやつて位置付けです。

【森田】よく考えると、藤井厚二賞は若手の賞ではないですね。結構大きな物が出てくる可能性があるんじゃないでしょうか(笑)。

【中西】大物は両部門に出されるのではないのでしょうか。双方で評価が別れても良い

と思います。

【高木】逆に、それくらいとんがった評価をしていかないといけない、ダメなものか。それによつて研鑽していく方を持つていければと思う。

河井さんがいう「ライフスタイル」は、具体的にどういう事でしょうか。

ライフスタイル

【畑】ライフスタイルは大事な言葉で、それをなくしたら賞は成立しな思つています。それは何かというと、現代性だと思ふんです。

今、造つて、今、選ぶ賞なわけですからどう考えても現代のライフスタイルと言うこと抜きには賞その物が成立し得ない筈です。ライフスタイルと言うと、凄くトラディショナルなライフスタイルが京都に特殊に残つている、と言うよりは、「今」だ。現代性、今性って言つたほうがもつとタイムリーですね。木と言つた時に伝統的な価値とか意味だけでなくなつていて、安いと言ふこともはつきり言えば価値だと思ふわけですね。今性、現在性を言うものを鑑みた時に木の持つている価値と言うものをどういう眼差しで、何が考えられるか、必ずしも京都性に縛られずに、そこがいわゆる「ドライ」に考えられるかが大事だと思ふます。木をつかつてアクロバティックなことをやつているとか特殊な事をやつていることがマストだとは私は思いません。

京都の建築つくるのに、京都性なんかはどうでも良いんだけれども、例えば隣家との間隔がこういう地割になつているとか、避けようのない問題としてあり引き受けざるをえない状況があるはずなんです。そういうことに関して非常にドライに木と言ふものをどううまく使つているか、価値を生み出しているかと言ふことが評価の対象に

なるのではないかと思ひます。

その意味ではライフスタイルというのは京都的ライフスタイルと言ふことではなく、現代性だと僕は捉えています。

【河井】僕が言おうとしている事は、たぶん近代を乗り越える意味での現代性の中に「京都」つていうのがあるよねと。例えば隣家との関係と言ふことの中に、それは「折り合いがつく」という価値観でありますよね。折り合いつけなきゃしょうがない隣家との関係、とか、木という材料にしても野放図に性能を要求してもダメで、折り合い付けないといけない。ここは30年に一度は取り替えないといけないという部分があつて、それはもう生活に組み込まれているのですから、いわゆるライフスタイルですよ。そういう折り合いがライフスタイルの外から見た時にあると思ふんですよ。

室温は21度が快適と言ひながら冬でも暖房バンバンまわしてTシャツ一枚でアイスクリーム食つて嵌め殺しのガラスで雪原見て、「あつ熊が歩いてるー」ていうのが最高に豊かなんだ、て言う話じゃないわけですよ。片や、そんな冷蔵庫みたいな場所ではなくて、吹きさらしの方丈で、寒いのでドテラ着て手焙りしながら紅葉が散つて行くのをしみじみと見て「良いものであるなあ」みたいな。

今の我々のライフスタイルは近代のライフスタイルで、結局折り合いを付けないといけない。

皆が野放図にやつていって良いというのはダメというのがCO₂の話などであるが、それで無理が出てくる。それを乗り越える為、そこに折り合いをつけていくと言ふのが知恵でもあるわけですね。それは先ほどのアイスクリームみたいな足し算感覚ではNGなわけですね。そうではなくて、あるものの中で折り合い付けてそこに色んな物を込めていくと豊かになるのではないかと。むしろ価値があるものができると言ふことが提示ができると思ふ。

畑さんが凄く警戒するのは、情緒的な事に走つて、京都といえれば我慢すればなんでも綺麗なんだ!とか暑いとか寒いとか関係ない!紅葉きれいだろ!的な思考停止のよな事だと思ふ。

そういうのではないが、散りゆく紅葉をみて良いと感じる、と言ふのは結構重要だと思ふ。アイスクリームのカロリーを乳脂肪との関係でどうたらワハハ、というのじゃなくて、ほんのり甘くて美味しいとか。腰掛待合にある手焙も、あの小さな炭一つのちよつとした熱が寒い中では暖かく感じるなど。

これつて省エネですよ。腰掛待合を囲つて断熱材をしっかりと寒くないようにするよりは、精神論に逃げ込まないように弁えたうえで、折り合いのつく所で、これぐらいなら手焙りの有り難みを感じて寒いが気持ちが良い、と言ふのが体系的な技術で、これが僕の言うライフスタイルと言ふとしたわけですね。

【高木】スマートにやるところに、京都があるという事ですね。

【河井】そうですね。それに皆もそれに期待してますよね。妄想が半分以上かも知れませんが、こういうことを外の人たちは京都に期待していると思ひます。

【高木】それに応えないといけないですよ。

木というの、常に付いてくる「所謂」というのを取つて、木は何か、木と京都の関係とかいろいろな角度で見えていく作業が必要ですね。今回、賞のテーマを「木造」にはあえてせず、「木」にしたのはその辺りを意識しての事ですね。

多くの方に応募して頂き、切磋琢磨できる状況が生まれてくることを期待したいと思います。